森鷗外「魚玄機」試論

九内悠水子

はじめに

「魚玄機」は「中央公論」（T4・7）に発表された、鷗外にとって第九作目の歴史小説である。この作品について斎藤茂吉は、次のような二つの見解を示した。

此短篇は聡慧で詩を善くした一少女が、身体的精神病的に発育変化して行く有様を叙し、現代性欲学の結論が、晩唐の過去世に活きた実例として現出してゐるのに作者は興味を持つたのであつただらう。[注一]

接触衝動、快美感覚の発育、男女間の性欲の違ひ、嫉妬感情発露の状などを取扱つて、それを何人も直接魚玄機に接触し、実験し得るやうな具合に叙述してゐる。[注二]

右の、作品の主題は玄機の性的成長過程にあるとした茂吉の主張は、坂本政親氏[注三]「（引用者注―先に引用した茂吉の見解は）本文に即して極めて適切」、尾形仂氏[注四]「いわばこれは、女性版『ヰタ・セクスアリス』だといってもよい」、浜地智子氏[注五]「鷗外の『魚玄機』では、彼女の比類なき詩才は無論、楽人陳某を自分の恋愛の対象として積極的に求めるに至る過程が、意識的に描かれている」、鈴木剛氏[注六]「氏は（引用者注―大岡信は注二に挙げた斎藤茂吉の見解にくみした上で）、鷗外の書きたかったのは魚玄機の神話なのだ、と結ぶ。この意見に私も賛同する」、渡辺澄子氏[注七]「らいてうの『小倉清三郎氏に』がきっかけとなって、女性の性欲に異常とも思われる興味をおぼえたのではないだろうか」というように、現在に至るまで一貫して支持され続けている。しかし、それだけでこの作品を読み解くには若干無理があるのではないだろうか。その一例として、温飛卿に対する記述の多さが挙げられよう。これが別に無くとも、楽人陳を設定することで“玄機の性的成長過程”を描くことは十分可能なのであるが、何故か作者はかなりの力点をかけて温を描いている。又、采蘋との同性愛や中気真術による性的開眼など、一般的女性の性的成長過程には余り存在しないと思われる要素が取り入れられている、そのことにも疑問を感じずにはいられないのである。本稿では、温と玄機の関係に着目しながら、このような設定の必然性を明らかにしていきたいと考える。

一

「魚玄機」において何故温はここまで描き込まれたのだろうか。又、温という人物を設定することに一体どのような意味があったのだろうか。坂本政親氏[注八]はそれを次のように解釈する。

要するに「魚玄機」執筆当時の鷗外の心境は、何れにも徹せず、極めて複雑微妙なかげりを見せたのである。一は応制の詩を契機として高まった皇室尊崇の哀情、ならびに官僚的功名的な心の昂ぶり、他は「老来殊覚官情薄」の一句に代表される官僚機構への不平不満の抬頭、この両者のせめぎ合いの中にこそ、この作品は生まれたと見るべきではあるまいか。従って前者の心情は玄機に托せられ、後者の心情は飛卿に形象化せられたとすべく、その対照の中にも作者の真意は、梢々後者に傾いているかの如くに思われる。

又、山崎一穎氏[注九]も坂本氏同様、温の傲慢な態度を「官僚機構に対する不平不満」とみなし、次のように述べる。

鷗外は魚玄機という唐代の女詩人に興味を抱いたと言うよりも、寧温飛卿により強い興味と共感を抱いたのではなかろうか。と言うのは、明治三十七年佐佐木信綱氏から『唐女郎魚玄機詩』を送られた時は、魚玄機の特殊な生き方に引かれた事は事実であるが、それから十有余年経た後に、いままで坐りなれた陸軍軍医総監医務局長の職を退ぞかなければならなかった時、ひしひしと迫りくる老の寂しさ、不平不満、いらいらした焦燥感、空虚感を感じ、魚玄機その人よりも、唐代の複雑な社会機構の中で反骨精神を貫き、反逆的な生き方をした魚玄機の師である温飛卿により強い共感を持って接したのではなかろうか。

しかし、温の反抗のベクトルは決して官僚機構に向いているのではない。彼がそのような態度を取っているのは、地位を持っていながらも才のない人物、つまり綯や宣宗に対してである。

場外の名は京師に騒いで、大中四年に宰相になつた令狐綯も、温を引見して度々筵席に列せしめた。或る日席上で綯が一の故事を問うた。それは荘子に出てゐる事であつた。温が直ちに答へたのは好いが、其詞は頗る不謹慎であつた。「それは南華に出てをります。余り僻書ではございません。相公も樊理の暇には、時々読書をもなさるが宜しうございませう」と云つたのである。

又宣宗が菩薩蛮の詞を愛するので、綯が塡詞して上つた。実は温に代作させて口止をして置いたのである。然るに温は酔つて其事を人に漏した。其上嘗て「中書堂内坐将軍」と云つたことがある。綯が無学なのを譏つたのである。

温が、才のある人物であれば身分、性差を越えてこれを認める度量の広さを持っていたことは彼の玄機に対する態度をみれば明らかである。それに、温が本当に官僚機構に不満があるのであれば、何も仕官しなければいいのであるが、「只温のみはいつまでも及第しない」とあるように、彼は何度も、挙場に入っている。温は一貫して仕官に対しかなりの執着を見せており、結果的にはそれが彼の随県における非業の死を招いたと言えるだろう。

「魚玄機」執筆時、確かに作者である鷗外は官を辞するか否かという微妙な状態にあり、詩には「老来殊覚官情薄」とその心境を吐露してもいる。しかしながら、先に確認したように、温は官僚機構に対する不満を体現しているわけではない。それ故ここに作者の伝記的事実を持ち込んで、温が設定された意味を考えることには無理があるのである。

二

ここで改めて、温が設定された意味を問い直してみたい。まずはその手がかりとして、温と玄機との関係について見ていくことにする。

妓等が魚家に帰つて、頻に温の噂をするので、玄機がそれを聞いて師匠にしてゐる措大に話すと、其男が驚いて云つた。（中略）

それを聞いてからは、妓等が令狐の筵会から帰る毎に、玄機が温の事を問ふ。妓等も亦温に逢ふ毎に玄機の事を語るやうになつた。

玄機は、妓らがしきりにした温の噂を聞くうちに、面識もない彼に尊敬とも憧れともつかぬ思いを抱くようになっていた。やがて玄機十五才の時、二人は対面することとなる。その際「近業があるなら見せて下さい」と問うた温に、玄機は「題を課してお試み下さい」と返し、「江辺柳」の題で詩を作った。「温は一誦して善しと称し」、「彼輩（引用者注―挙場に入ったものの苦索して一句を成し得ない男子）は皆遠く此少女に及ばぬ」とその才を高く認めた。これ以後、玄機が刑せられるまで二人は師弟の関係であり続ける。しかし、作中にはそれを越えた二人の関係、すなわち互いに求めあう関係が見え隠れするように思われるのである。今少し、それを追ってみよう。

まず、温が初めて玄機と対面したときの印象は「温の目に映じた玄機は将に開かむとする牡丹の花のやうな少女」であったと表現されている。また、「花の如き十五歳の少女」「三年前から詩を教へてゐる、花の如き少女」などと、玄機は温によって繰り返し花に喩えられる。つまり温は、玄機の才能と共にその美しさをも十二分に意識していたところがある。彼は、彼女との詩篇の応答や「李の口」から、間接的ではあるが玄機の生活を把握し続け、生涯に渡って彼女を見守り続けた。「玄機の刑せられたのを哀むものは多かつたが、最も深く心を傷めたものは、方城にゐる温岐であつた」といった表現からは、温の玄機に対する深い思いを感じ取ることが出来る。

又、対する玄機の方は、もっと如実に温への思いが現れている。

李は切に請ひ、玄機は必ずしも拒まぬので、約束は即時に成就して、数日の後に、李は玄機を城外の林亭に迎へ入れた。

此時李は遽に発した願が遽に愜つたやうに思つた。しかしそこに意外の障礙が生じた。それは李が身を以て、近かうとすれば、玄機は回避して、強ひて逼れば号泣するのである。（中略）

李は玄機が不具ではないかと疑つて見た。しかし若しさうな

ら、初に聘を卻けた筈である。李は玄機に嫌はれてゐるとも思ふことが出来ない。玄機は泣く時に、一旦避けた身を李に靠せ掛けてさも苦痛に堪へぬらしく泣くのである。

李の妾になることをあっさりと承諾したにもかかわらず、「李が身を以て、近かうとすれば、玄機は回避して、強ひて逼れば号泣」した。このような矛盾した態度について作中の語り手は、玄機には「蔓草が木の幹に纏ひ附かうとするやうな心」はあったが、「房帷の欲」はなかったのであると説明してはいるが、それは曖昧で漠然としたものでしかない。ところがこのような玄機の態度は、彼女の意識下に存在する温への思いによるものだと見ると、それは別段不自然なものでもなくなるのである。つまり、玄機は温を意識下で思っていたために理由もなく、又本人にとっても訳が分からぬ儘に李を拒絶する事になったのである。また、次のような記述からも、玄機の温に対する潜在的な思いを見出すことが出来るだろう。

客と共に謔浪した玄機は、客の散じた後に、怏々として楽まない。夜が更けても眠らずに、目に涙を湛へてゐる。さう云ふ夜旅中の温に寄せる詩を作つたことがある。

（中略）

玄機は詩筒を発した後、日夜温の書の来るのを待つた。さて日を経て温の書が来ると、玄機は失望したやうに見えた。これは温の書の罪ではない。玄機は求むる所のものがあつて、自らその何物なるかを知らぬのである。

しかしながら、このような二人の思いは決して表立って現れることはない。玄機と温の出会いの場面に付された「（引用者注―温は）年は四十に達して、鍾馗の名に負かぬ容貌をしてゐる。開成の初に妻を迎へて、家には玄機と殆ど同年になる憙と云ふ子がゐる」という記述は、温は容貌が醜い上に、玄機より二十五才以上も年長であり、彼女と同年代の息子までいることを提示している。それは、玄機と温との間には恋愛の関係が成立し得ないことの暗示とも、温が無意識的に行っている玄機への思いの抑制とも取れるだろう。玄機も「求むる所のものがあつて、自らその何物なるかを知らぬ」と、彼女自身この思いに気づいておらず、まさに意識下の恋とでも言うべき状態にあるのである。

このように、「魚玄機」の中に描かれている交情は、玄機が嫉妬から婢を殺してしまうほどにのめり込んだ恋人、楽人陳に対してのものというよりも寧ろ、温に主眼がおかれているように思われる。作中から読みとれる陳の人物像は、「玄機より少」く、「体格が雄偉で面貌の柔和」であることくらいであり、寡黙な少年が、玄機と付き合った七年を経て、彼女の婢である「緑翹を揶揄」するまでに成長したという外面的な僅かの情報しか作中には書き込まれていない。陳は「玄機の挙措が意に満たぬ時」「多く緑翹と語」りあうなど、緑翹と少なからず親しい関係になっていたにも関わらず、「緑翹がゆうべからゐなくな」ったと玄機に言われても関心を示さなかった。この点に関して、彼の冷淡な性格によるものなのか、もしくは緑翹にさして関心がなかったことによるものなのか、作中からは判断でき

ない。更には、陳に楽人としての才能があるのかないのか、彼は玄機のことをどれほど愛しているのかなど、具体的なことは何一つ明らかにされていない。これらはすべて、事の成り行きが玄機に視点をあてて語られているにことに起因している。

三

さてこのような玄機と温の、互いの互いに対する思いを、「魚玄機」の低音部、つまり物語を支える背景としての機能と考えると、冒頭で提示したような、玄機と采蘋の同性愛や中気真術による性的開眼の意味が見えてくる。

まず中気真術について考えてみよう。

当時道家には中気真術と云ふものを行ふ習があつた。毎月朔望の二度、予め三日の斎をして、所謂四目四鼻孔云々の法を修するのである。玄機は道るべからざる規律の下にこれを修すること一年余にして忽然悟入する所があつた。玄機は真に女子になつて、李の林亭にゐた日に知らなかつた事を知つた。

多くの論者が指摘するように、玄機は、陳との関係においてではなく、中気真術という外的要因によって性的開眼を果たしている。渡邊澄子氏は「鷗外の描いた玄機は『中気真術』という修法によって『春的欲望』をこじ開けられ、その欲望のためになにもかも見えなくなって、『知慧』も『才気』も『怜悧さ』も働かず『房帷の欲』から殺人を犯したのだ。後味の悪いいやな作品である」[注十]と述べているが、この「中気真術」は性的目覚めの発端としてまず設けられているのである。

そして次に、采蘋との同性愛関係についてだが、この采蘋という人物が全くの創作であることは既に先学の指摘にある通りである。作者は「贈隣女」という玄機の詩を引いて彼女と采蘋との関係を造型した。わざわざ史実にない事象を作品に盛り込んだのは、必然的な理由があってのことであろうと思われる。

ここで今一度、この二つの設定を、玄機と温の互いの互いに対する恋愛感情に即して考え直してみたい。玄機は、温に対する自らの思いに気づかぬまま、李の妾となった。しかし彼女の意識下にあったその思いは、李に身を任せることを拒否し、結果として二人の関係を破局へと導く。李と別れて、咸宜観に入り女道士になった玄機は、そこで中気真術によって性的に開眼させられる。精神的な目覚めを迎える前に、肉体的に目覚めさせられてしまったのである。

つまり、「中気真術」は玄機の精神と肉体とを乖離させる外的要因として機能した。かくて、采蘋との対食・そして別れは、玄機の中にある、精神とは別の感覚の増大を促すべく設定されているのだと考えることができる。このような精神と肉体の乖離は、玄機の詩作に対する態度の中にも見て取ることができる。

玄機は才智に長けた女であつた。其詩には人に優れた剪裁の工があつた。温を師として詩を学ぶことになつてからは、一面には典籍の渉猟に努力し、一面には字句の錘練に苦心して、殆

寝食を忘れる程であつた。それと同時に詩名を求める念が漸く増長した。

咸宜観に入るまでは詩作に対してまじめに取り組んでいた玄機であったが、中気真術・采蘋との関係・陳との出会いを経てから、その態度が変化している。

陳は時々旅行することがある。玄機はさう云ふ時にも客を迎へずに、籠居して多く詩を作り、それを温に送つて政を乞うた。温は此詩を受けて読む毎に、語中に閨人の柔情が漸く多く、道家の逸思が殆無いのを見て、訝しげに首を傾けた。

詩作が第一義的なものから二義的なものへ――学問としての詩作からつれづれを慰めるための一手段へとなっている。つまり詩作に対する態度の変化は精神が肉体に凌駕されてゆく過程でもあるわけである。采蘋との同性愛は、その流れの一段階として置かれていると考えられ、陳との出会いによって玄機の肉体は完全に精神と分離してしまうのである。

玄機と陳が出会ってからの七年間は特に作中には記されていないのであるが、恐らく何事もなく過ぎていったのであろう。しかし、玄機の身の回りの世話をしていた老婢が死に、新しく十八才の緑翹がやってきたことで、その関係が一転して崩壊へと向かっていく。

咸通八年の暮に、陳が旅行をした。玄機は跡に残つて寂しく時を送つた。其頃温に寄せた詩の中に、「満庭木葉愁風起、透幌紗窓惜月沈」と云ふ、例に無い凄惨な句がある。（中略）

陳が長安に帰つて咸宜観に来たのは、艶陽三月の天であつた。玄機がこれを迎へる情は、渇した人が泉に臨むやうであつた。暫らくは陳が殆虚日のないやうに来た。其間に玄機は、度々陳が緑翹を揶揄するのを見た。

ようやく玄機の陳への交情が深まったのである。その時、嫉妬の情も生じた。はじめ、小さかった不安は次第に玄機の胸に広がってくる。先に述べたようにこの過程は全て、玄機に対する視点から叙述されており、玄機の心情に沿って読み進めさせるような仕組みになっているのである。

そのうち三人の関係が少しく紛糾して来た。これまでは玄機の挙措が意に満たぬ時、陳は寡言になつたり、又は全く口を噤んでゐたりしたのに、今は陳がさう云ふ時、多く緑翹と語つた。其の上さう云ふ時の陳の詞は極て温和である。玄機はそれを聞く度に胸を刺されるやうに感じた。

さて夕方になつて帰ると、緑翹が門に出迎へて云つた。「お留守に陳さんがお出なさいました。お出になつた先を申しましたら、さうかと云つてお帰なさいました」と云つた。

玄機は色を変じた。これまで留守の間に陳の来たことは度々あるが、いつも陳は書斎に入つて待つてゐた。それに今日は程

近い所にゐるのを知つてゐて、待たずに帰つたと云ふ。玄機は陳と緑翹との間に何等かの秘密があるらしく感じたのである。

やがて、玄機の猜疑心は頂点に達し、激した彼女は「なぜ白状しないか」と叫びながら緑翹の「吭を扼し」そして殺してしまう。「玄機の緑翹を殺したことは、稍久しく発覚せず」、翌日来た陳も緑翹がいなくなったことを意に介せぬらしく見えたが、その秘密は、玄機を怨んでいた府の衙卒を勤めていた男によって暴かれるに至る。「玄機は毫も弁疏することなくして罪に服し」「斬に処」せられた。それまでの玄機は嫉妬のあまり理性を失っていたのであるが、ここへ来て彼女は毅然とした従来の姿を取り戻したかのように見える。つまり玄機は、刑に処せられることによって肉体的な呪縛から解き放たれた。肉体と分離された精神を再び取り戻したと言えるのである。

おわりに

「魚玄機」ではそのタイトルが示す通り、魚玄機を女主人公として物語が展開していくのであるが、鷗外はむしろ温飛卿の方が描きたかったのではないかという指摘がなされるほどに、彼の人生もかなりの紙面をさいて記述されている。

史料上から読みとれる温と玄機の接点は、それほどに強いものではなく、玄機から温への詩が現存しているもので二作残っていること、「唐才子伝」に「(引用者注―玄機) 復た温庭筠と交遊す」とあるくらいで、どの時期に二人がどのような交際を行ったのかについては不明である。玄機の性的成長をのみ描くのであれば、温は特別必要な存在でない。むしろ陳に焦点を当てるべきである。ところが作者は温を、玄機と同じくらいの力点をかけて描いている。それは、温と玄機の心の交流を作中に敷くための布石であったと思われる。そして「魚玄機」には、このような、玄機と温の、決して表には現れることの無かった思いを背景とし、中気真術・同性愛と言った外的要因によって肉体と精神とを分断されてしまった女の悲劇が描かれているのである。つまりこの作品の主題は、従来言われてきたような玄機の性的成長過程というよりもむしろ、精神と肉体の関ぎ合いに苦悩する人間の生き様を現したものと読めるのである。

「魚玄機」は、晩唐の女流詩人魚玄機を主人公として中国古典に材を取っており、同時期のいわゆる歴史小説群の中では、一見趣を異にしているかのように思われる。しかしながら、これを精神と肉体との関ぎ合いと読むならば、それは「佐橋甚五郎」「ぢいさんばあさん」などに見られる“本能が理性に勝ってしまったが故に人生が変わってしまう”という一連の流れに沿ったものとして位置付けることが可能であるように思われるのである。

注

注一　斎藤茂吉「解説」(S13・6　岩波文庫)

注二　斎藤茂吉「鷗外の歴史小説」(S11・6『文学』)

注三　坂本政親「鷗外作『魚玄機』私見」(S35・2『福井大学学芸学部紀要』第I部　人文科学第9号)

注四　尾形仂「『魚玄機』と〝新しい女〟たち」（S38・12『国語国文』32(12)）

注五　浜地智子「「森鷗外と唐代女性詩人魚玄機」（S52・10『香椎潟』23）

注六　鈴木剛「森鷗外の女性描写―『雁』『魚玄機』『ヰタ・セクスアリス』―」（S62・3『日本文学論究』46）

注七　渡邊澄子（「『魚玄機』小考」（H11・12『森鷗外研究』8）

注八　注三に同じ

注九　山崎一穎「『魚玄機』論」（S39・2『国文学研究』29）

注十　注七に同じ

〔付記〕

「魚玄機」本文の引用は、『鷗外歴史文学集』第三巻（H11・11岩波書店）に拠る。ルビは適宜省略した。

（くない　ゆみこ）